



ひらひらだより

No.3 2019.5.31

今年も、森の中での色の時間が始まりました。冬の間お休みしていた色の時間、初めて色の時間と出会うまつぼっくりのこどもたち、4か月ぶりに会うくり、おおくりのこどもたち。少しドキドキしながら色の時間を迎えました。

こどもたちと描く色の時間では、濡らした紙にきいろ、あおいろ、あかいろの三色の絵の具を使って色彩と対話していきます。何かを描く、というよりは生きた色彩そのものを体験していきます。

初めての色の時間を迎えるまつぼっくりさんは、まずそれぞれの色彩、きいろさん、あおさん、あかさんと友達になることから始めます。

くりさん、おおくりさんになると、その日の空の様子、風の様子や光の様子、自分に降り注ぐ太陽の暖かさや、肌に触れる風の冷たさなどを感じながら、その日のテーマに沿って色を体験していきます。

くりさんおおくりさんの初日のテーマは”種まき”にしました。

その日は太陽が顔を出していて、暖かい光が木々の枝を通して私たちに降り注いでいました。風はかすかに枝を動かし、時々頬を軽く滑っていきます。

そんな”今日の”森の中で、”春の光”を描いていきました。重ねて、”自分たちがまぶしい!と感じる””くらの光を描くよう伝えました。

こどもたちは黄色い光を重ねていきます。描いていく中で、筆を強く紙に押さえつけると反対に黄色が剥げて薄くなってしまふ事も発見します。なので、優しく丁寧に重ねていきます。紙の端っこもよく見てみます。描き忘れた白い穴がないかどうか注意深く見ていきます。時々隣の人の絵を見て、”～ちゃん!光に穴があいてるよ!!”と教えてくれる子がいます。見てみると、確かに画面の隅っこに小さな白い穴が開いています。が、教えてくれた子自身の光にも、それよりも大きな穴、しかもその子の真ん前に空いていたりします・・・”～君、自分のところを見てごらん”と伝えると、”あ!”と自分の光に注意を戻し、また描きはじめます。

”まぶしいくらの光”を描き終え、次に光の中に種を蒔くように伝えます。大事な大事な生命が詰まっている種です。だから丁寧に蒔くようにお願いします。大きな種を蒔く子、小さな種を一粒一粒丁寧に置いていく子、筆を振って一度に何粒も蒔いていく子。皆それぞれですが、その日は偶然にも!?色の時間の前に実際に稲の種を蒔いたということで、どのこどももおさら丁寧に種をまいているようでした。

最後に種に水をあげます。種一粒一粒に丁寧に水を置いている子、種と種の

間に水をいきわたらせている子、画面全体に水を撒いて種が見えなくなってしまう子・・・それぞれの方法で水をあげています。

その中で、ひととき丁寧な時間をかけて水を撒いている子がいました。私はその子を見て少し驚いてしまいました。というのも、その子は去年の12月までは、どちらかというときさっと描いて一番最初に片付けに入る子だったからです。(決して悪いことではないのですよー)色彩はどちらかというとき単色で、力強くはつきりとしたものでした。それが今回の色彩たちは非常に繊細で、お互いに優しく混ざり合い、その中からさまざまな新しい色合いが生まれていました。あまりの違いに思わず”あれ?別人?””と思ってしまうほどでした。いったいこの4か月、冬の間何が起こったんだろう・・・

その日のテーマに沿って色彩を体験した後は、2枚目”自由に”描くことをします。たいてい子供たちは、”やった～!自由だ!!”と二枚目に取り組みます。先ほどの子も2枚目に取り組んでいます。やはり、じっくりと色彩に向き合いながら・・・

私は、その子の生み出す様々な色調、またお互いにバランスを取ろうとしているかのようにも見える色彩たちを見ながら、同時にびっぴのこどもたちが、森の中で心と身体いっぱい体験していること——お友達と遊んだり、時にはけんかをしたり、お互いに話し合ったり、自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちを聞いたり、そして仲間を理解したり…。その森の中での毎日の積み重ねを見ているようでした。

またその子がじっくりと色彩に向き合う姿を見ながら、こどもたちがひとつひとつ年を重ねていく中で湧いてくる新しい感覚、世界(外界)との関わり、それはもしかしたら不安な気持ちかもしれないし、ある内的な葛藤かもしれない。そんな内的な動きや感情を色彩と重ね合わせながら自分と向き合っているのかもしれない・・・


まつぼっくりさんで仲良くなった色彩が、子供たちが成長するにつれて、その子の想像を創造するツールになったり、反対に自ら混ざり合う色彩がこどもたちの想像、ファンタジーを膨らませたり。時には色彩がその子の心のバランスを取る薬になったり・・・色彩たちは、私が想像していた以上にこどもたちの成長に寄り添っているのだな・・・とじんわり感じた色の時間でした。

さて、こどもたちが丁寧に蒔いたあの種はどんな芽を出して成長するのだろうか・・・?こどもたちが見せてくれる色彩の世界。また次の時間が楽しみです。

小林郁絵

自然と友たち ～5月 ナナホシテントウ～

9日、初めて畑へ行った日のこと。お弁当を食べた後、気持ちの良い野原で、ジャガイモを植える前にも、テントウムシを見かけた匠彌君は、「またいるかな。」と草むらを探索中。ビニール袋を2重にして、虫を着実につかまえることを思いついた夏樹君。すると、「こうするのいいね!」と野花ちゃん。夏樹君は、「早くかぶせないと逃げちゃう。あ、いい加減にしなさい!」と、必死に袋をよじのぼるテントウムシに向かって言っています。翔々君と野花ちゃんが同時にテントウムシを見つけると、自ら「小さい子にあげるんだよ。」と野花ちゃん。素直に言える翔々君。「やった! 2匹見つけた!」と次は翔々君が夏樹君と同時に見つけます。今度こそは、と暗黙の「小さい子優先ルール」にのっとり、テントウムシをもらえる権利を獲得! 野花ちゃんも、「ビニール袋、貸してあげようか。」と品カ的。抽葉ちゃんはお花の気持ちになって、「(お花が)テントウムシ、かわいって言うかな。」「ヨモギが『ん、ん』って言った。アリさんが(のぼって)くすぐったいって」と、想像力豊かに話せる田蔵君は、テントウムシが小さいためか、「赤ちゃん」と呼び、「赤ちゃんと葉はだよ。袋の中でグランコしてる。手つなげないで、フルになってこわいって。」と袋の中の不安定さを察している様子。

野原でふれ合っていたのはナナホシテントウでした。 ナナホシテントウは肉食で、アブラムシを食べます。
には、アブラナ科で、菜の花のような色のイヌナズナが咲いていました。ここに黄色を好むと言われるアブラムシが集まり、ナナホシテントウが育ちやすい環境だったので、たくさんいたのかもしれません。テントウムシには、植物食の種もいます。今回、みんなが植えたナス科のジャガイモの葉をも食べてしまう、ニジュウヤホシテントウ類です。人間にとっては、やっぱり者ですね。もし、万が一、ニジュウヤホシテントウ類が現れたら、遊びながら被害を防いでほしいものです。

：真理子

